

浄土寺

尾道の山腹にはいくつもの神社仏閣がありますが、浄土寺ほど多くの要素を併せ持つ寺院はありません。616年に半ば伝説的な存在である聖徳太子によって建立された浄土寺には歴史的に重要な建築物が集まっています。

1325年に元の寺の建物が焼け落ちた後、豊かな商人をはじめとする尾道の人々は、浄土寺の再建に尽力しました。1327年、大工の藤原友国と藤原国貞が新たな本堂を完成させ、今日も建っているその本堂は国宝に指定されています。本堂は折衷様式で建てられています。主として平安時代（794-1185）に一般的だったスタイルで建てられていますが、鎌倉時代（1185-1333）に中国からもたらされた建築様式の影響も見て取ることができます。

浄土寺にはもう一つ国宝が建っています。多宝塔（多くの宝に飾られた塔）は1329年に建てられ、日本の三大多宝塔の一つと見なされています。塔はアジア各地の寺院にあります。二重塔は日本独特のもので、かつては浄土寺のような密教寺によく見られました。浄土寺のこぢんまりとした境内に建つ他の建物のほとんどは日本の重要文化財に指定されており、その中には印象的な山門（正面ゲート）、露滴庵（茶室）、阿弥陀堂（阿弥陀仏のお堂）があります。興味深い建物があまりにもたくさんあるため、山門から一望できる尾道の景色を楽しむのを忘れたとしても仕方ないでしょう。